人間の脳――神からの賜物、
いのちを大切に守る使命

脳・知恵・神の前における人間の責任についての聖書的エッセイ

著者：Maru 810

はじめに――驚くべき神の創造

人間の脳は、記憶し、考え、感じ、言葉を理解し、選択し、行動するための、きわめて精巧な器官です。科学はその構造と働きを少しずつ明らかにしています。しかし、聖書的なまなざしは、脳を単なる生物学的装置として見るだけではありません。脳を含む人間の全存在を、神から受けたいのちの賜物として受け止めます。

> 「わたしはあなたをほめたたえます。わたしは恐ろしいほど驚くべきものに造られた。」（詩編139編14節）

この言葉は、人体の仕組みを科学的に説明する文章ではなく、造られたいのちへの感謝と畏敬を表す祈りです。脳について学ぶことも、知識を誇るためではなく、いのちを尊び、隣人に仕え、創造主に感謝する道となり得ます。

1．大脳――思考、記憶、判断

大脳は、思考、記憶、言語、感覚の解釈、判断など、多くの働きを担います。人間は学び、過去を振り返り、未来を思い描き、行動を選びます。しかし、知的能力が高いことだけで、人間の価値が決まるわけではありません。病気や障がいによって認知機能が変化しても、その人の尊厳は失われません。聖書の視点では、人間の尊厳は能力の大小ではなく、神に愛されたいのちであることに根ざしています。

2．小脳――調和と身体の協調

小脳は、姿勢やバランス、運動の調整、動作の学習に深く関わります。歩くこと、手を伸ばすこと、言葉を滑らかに発することにも、身体の多くの部分の協調が必要です。この協調は、互いに異なる人々が共同体を形づくる姿を思い起こさせます。共同体では、誰もが同じ役割を担うのではありません。それぞれの違いを認め、支え合うことによって、共に生きる道が開かれます。

3．脳幹――いのちを支える基本的な働き

脳幹は、呼吸、心拍、覚醒など、生命維持に欠かせない働きに関わっています。私たちが意識していない間にも、身体は絶えず働き続けています。この事実は、いのちが自分の意志だけで完全に支配できるものではないことを教えます。生きていることは、受け取っている恵みでもあります。だからこそ、病む人や弱い立場にある人のいのちを、効率や有用性だけで評価してはなりません。

4．前頭葉――計画、選択、責任

前頭葉は、計画、注意の調整、衝動の抑制、意思決定などに関係します。人間は欲望や感情にただ従うのではなく、立ち止まり、考え、よりよい行動を選ぶよう招かれています。聖書は、愛を心だけの感情に閉じ込めず、具体的な生き方として示します。

> 「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」（マルコによる福音書12章30節）

思考と選択は、神と隣人への愛に向けられるとき、責任ある自由として実を結びます。

5．頭頂葉――身体感覚と世界の理解

頭頂葉は、触覚や身体の位置の感覚を統合し、空間を理解することなどに関わります。私たちは身体を通して世界と出会い、他者が自分とは異なる存在であることを学びます。相手の痛みを自分のものとして完全に感じることはできなくても、その声に耳を傾け、尊重することはできます。共感は、相手を自分と同じにすることではなく、違いを認めながら近づくことです。

6．側頭葉――聴くこと、言葉、記憶

側頭葉は、聴覚、言語の理解、記憶などに関係します。聖書において「聞く」ことは、音を耳に入れるだけではありません。相手の言葉に心を開き、理解し、応答する姿勢を意味します。

> 「人は皆、聞くに速く、語るに遅く、怒るに遅くあるべきです。」（ヤコブの手紙1章19節）

よく聴くことは、相手を大切にする行為です。神の言葉に耳を傾け、隣人の声を聴くことによって、知識は思いやりへと導かれます。

7．後頭葉――見ることと、見つめ直すこと

後頭葉は主に視覚情報の処理を担います。しかし、見ることと、正しく見つめることは同じではありません。偏見や恐れ、欲望によって、私たちは現実を歪めて見ることがあります。イエスは、内面の光と人間のまなざしについて語られました。

> 「あなたの目が澄んでいれば、全身が明るい。」（マタイによる福音書6章22節）

この言葉を医学的な説明と混同してはなりません。むしろ、自分の心が何に向かい、何を大切にしているのかを省みる霊的な招きとして受け止めることができます。

8．視床下部と身体の調整

視床下部は、体温、空腹、渇き、睡眠、ホルモン調節など、身体の内部環境を保つ働きに関わります。人間は霊的な存在であると同時に、休息や食事、水分、安心、他者とのつながりを必要とする身体的な存在です。信仰は身体を軽んじる理由にはなりません。身体の必要に気づき、適切に休み、病む人を支えることも、いのちを大切にする実践です。

9．知恵は知識を超える

脳についての知識が増えても、それだけで人間が賢くなるとは限りません。知恵とは、知識を何のために用いるのかを識別し、善いことを選び、他者への責任を引き受けることです。聖書は、知恵の出発点を神への畏れに置きます。

> 「主を畏れることは知恵の初め。」（箴言1章7節）

神への畏れとは、恐怖に支配されることではなく、自分が世界の中心ではないと認め、いのちと真理の前に謙虚になることです。

10．心を尽くして神と隣人を愛する

聖書は、心、魂、力、思いを尽くして神を愛するよう招きます（申命記6章5節）。イエスはこの戒めを、神への愛と隣人への愛から切り離しません。脳が支える思考や選択も、身体が行う奉仕も、愛の具体的な表現になり得ます。ミカ書は、正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むことを求めます（ミカ書6章8節）。

> 「あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」（コリントの信徒への手紙一10章31節）

11．キリストにおいて見いだす道

キリスト教信仰において、知恵と真理は抽象的な理念にとどまりません。イエス・キリストの生涯、言葉、十字架、復活において、神の愛が示されます。

> 「わたしは道であり、真理であり、命である。」（ヨハネによる福音書14章6節）

この信仰は、医学や科学を否定するものではありません。むしろ、科学的な探究を誠実に進めながら、その知識を人間の尊厳と共通善のために用いる責任を思い起こさせます。脳の病や障がいに向き合う人々、患者、家族、医療・介護に携わる人々に、理解と連帯を示すことが求められます。

12．いのちを守る責任

脳は、神経科学の研究対象であると同時に、一人ひとりのかけがえのない人生を支える身体の一部です。睡眠、学び、適切な医療、安全な環境、人間関係、休息は、脳と心の健康を支える大切な要素です。自分の限界を認めて助けを求めることも、他者を支えることも、弱さではありません。

創世記は、神が土の塵から人を形づくり、命の息を吹き入れたと語ります（創世記2章7節）。この詩的で神学的な物語は、人間が身体と霊性を切り離して生きる存在ではないことを示します。いのちを受けた者として、私たちは自分自身と隣人、そして共に生きる世界を大切にするよう招かれています。

結び――驚きから感謝へ、知識から愛へ

人間の脳について学ぶことは、自然の精巧さへの驚きを深めます。聖書的な省察は、その驚きを感謝へ、知識を謙虚さへ、能力を奉仕へと導きます。脳の働きに優劣があっても、人間の尊厳に優劣はありません。すべての人は尊重され、支えられ、愛されるべき存在です。

> 「あなたがたのすることはすべて、主イエスの名によって行いなさい。」（コロサイの信徒への手紙3章17節）

神から受けたいのちを感謝し、知恵を善のために用い、弱い人と共に歩み、日々の小さな選択を愛によって形づくること。それが、脳という賜物を神と隣人に仕えるために用いる一つの道です。

結びの祈り

いのちの主である神よ、
私たちの身体と心、思考と記憶を、あなたからの賜物として受け止めることができますように。
知識を誇るのではなく、知恵と謙虚さを求め、すべての人の尊厳を守ることができますように。
病む人、弱い人、孤独な人の声に耳を傾け、あなたの愛を行いによって示すことができますように。
主イエス・キリストによって。アーメン。